【セミナー発表要旨】

記所伝の弓

長瀬　治

古代文学における研究方法を探求するに当たって、特に「弓」をとりあげるのは、短時間の口頭発表には、問題が具体的で、理解されやすいと考えたことにもよるが、何よりも、従来の弓についての研究は、武器としての観点に立つだけで、形而上的な面での考察がほとんど看過されているように思われるからである。少くとも記所伝の弓には、単純な、武器ないしは狩猟具としてのものではなくて、それ以上の、呪的な深い意味があるように思われる。

「誓約」の条に、「背には千入の靫を負ひ、手には五百入の靫を附け、また臂には、稜威の高鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪なす蹴ゑ散し、……」とあるのは、荒ぶる神を迎撃する、いかにも勇壮な描写であるが、中でも「弓腹振り立て」に注目したい。「弓腹」は、諸書「弓端」説をとるが、私はこれを「鳥打ち」と考えたい。平家物語(河原合戦)に、「(義経が)重藤の弓の鳥打ちを、紙を広さ一寸ばかりにきつて、左まきにぞ巻いたりける。今日の大将軍のしるしとぞ見えし。……」とあるのも、鳥打ちを弓の象徴と考えていたからであるはず。記の「弓腹」を振り立てての所作事の中には、神がかりする巫女の作法が伝承されていると考えたい。角力の弓取り式なども、この作法の例証と考えられるのではないか。この場合の弓は「破魔弓」であり、呪的な採り物であって、単純な武具、猟具ではないと思う。

「生弓矢」もまた征魔の呪具である。「その汝が持てる生大刀・生弓矢もちて汝が兄弟をば坂の御尾に追ひ伏せ……」とあるのは、弓が「大刀」と並んでの、威力のあるものと考えられていたことを示すものであろう。

「天の麻迦古弓」は、天若日子が地上に遣される時に下賜されたものであり、紀には「天鹿児弓」「天真鹿児弓」「天真鹿児矢」とあるのをみると、「カコ」という名称に、特に神聖な意味がありそうに思われる。この弓はこの後に「天の波士弓・天の加久矢」の名称で登場する。「ハジ」は木の名、「カコ」は「鹿児」つまり鹿の角で、共に材料を示していると言われるが、私はやはり弓・矢の威力を讃美する神秘な古語であったのだと考えている。この弓・矢はまた、天孫降臨の条にも、大伴氏・久米氏の祖らが携行したとしるされていて、伝統久しい弓矢の称呼であったことを思い知らされる。

大国主の命の成人戒の条を初めとして、記には「鳴鏑」の記事が多いのは、古人が音響に威怖感を抱いた例証であろう。そのことはまた、弓の弦鳴りの音に格別の意味を感じたことを示していると思う。「弦打ち」「鳴弦」の儀が、後世も長く、破魔・征魔の威力あるものとして行なわれたのは、この故にほかならない。そうした意味でも、私は「弓」の語源を、弓の弦鳴りの擬音語から発生したものと考えている。弦楽器の発生、発達もまたここにあったことは、当然のことであろう。とまれ、記所伝の弓が、厳粛な神事を伝える条項に登場していることは、注意しなければならない点であろう。

弓はまた考古学的にも好個の対象として多くの出土品が報告されてはいるが、石器や土器・金属器と違って、ほとんどが腐蝕してしまうため、体系的な研究のできがたいのが残念である。それにしても、火薬の発明までの長い期間、人間生活の日常必需の道具として重要な意味を持っていた弓は、精神生活にもまた大きな関係を有していたはずであり、この点に、今後の古代学の一面があるものと考えている。

万葉集の方法論を探る

町方和夫

四千五百余首の歌を収録した古代歌集「万葉集」は「多様な詩集が総合されたもの」[注1]であって、方法論を方向づけることはきわめて困難な事であるから、いきおい「自らの歩まんとする心構えと自らを戒める言葉」[注2]としてのべていき、究極的には「文学を味ふ心はすなほな心でなければならない」[注3]という言葉にかなっているかどうかに尽きるのではないか。文学研究はあくまでも「読む」という「積極的普遍的行為」[注4]の「障害除去」を目的とした「消極的専門的」であるから、万葉集にしても歌一首一首に凝縮された作者の全量は一つ一つの表象語に微妙に作用しているのであって、それを「知る」世界・味読の世界に高める精神的行為の基盤が文学としての万葉集研究であろう。文学研究の最重要な特性は「自由であること」[注5]に帰一するのであろうから、大胆率直な新見を吐くことも許されよう。[注6]その意味において、万葉集に限らず、すべての文学作品を物質的存在あるいは心理的存在の客体化としてその成立過程を探索する場合に二大別して、文献学的方法と哲学的方法になる。作品を物質的存在として物理的に帰納せしめようとする科学的なあまりに科学的な方法のもたらす microtome な probability を求める傾向にはしりやすく、ことばの生命を無視した把握のしかたである静態的研究に